

企画展「堀田一族と伏木 ～堀田善衛生誕100年記念・日本遺産「北前船寄港地」追加認定記念」
出品リスト

〔会期：平成30年9月8日（土）～11月25日（日）〕 協力・堀田善衛の会

◆港町「伏木」の歴史

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先 (寄贈者)
1	日本遺産「北前船寄港地」 関連紹介パネル		4	平成30年5月24日付で伏木を中心とした高岡の文化財が日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間(北前船寄港地・船主集落)」に追加認定された	高岡市HP、 文化庁HP
2	パネル「北前船の航路と寄港地」		1	日本各地の北前船航路と寄港地が記載	高岡市伏木北前船資料館
3	金刀比羅社 船絵馬「長永丸」	1926年(大正15)10月奉納	1	伏木湊町・金刀比羅社に奉納された船絵馬。表面の左隅には「絵馬藤筆」とある。これは江戸後期より栄えた船絵馬業者のことで、大阪北堀江に店を構え、船絵馬のみならず武者絵馬など様々な絵馬に腕をふるったという。額縁の左には「伏木湊町／松本六平」、右には「大正拾五年／拾月十日」とある。裏面には「寄進人／松本与三吉／喜一郎／鶴木平之丞／末子」とある	金刀比羅社
4	矢田神社 船絵馬「永宝丸」		1	矢田神社に奉納された船絵馬「永宝丸」。正和勝之助『越中伏木湊と海商百家』(桂書房、1995年)によると、永宝丸は伏木浦の太田屋与左衛門の持船で、船絵馬の寄進人は、林幸次郎とある	矢田神社
5	古府八幡社 船絵馬	明治期	1	2本のマストをもつ蒸気船を立体的にかたどった船絵馬。左下に墨で「□木□□□／謹製」とある	古府八幡社
6	引札「汽車汽船積取扱所／高岡市源平町／永久組運輸店(ほか)」		1	汽車汽船数48、積荷取扱所5社(永久組運輸店・北陸運輸組合高岡店・海陸保検荷物取扱所・日本運輸株式会社代理店・東京三鱗合資会社代理店)が記載。引札とは、現在の広告チラシのようなもので、年末に取引先などに配られた	高岡市伏木北前船資料館
7	引札「越中国伏木湊中道町柴野平右衛門」		1	「汽船号(10の汽船号名)／諸国旅人御定宿切符荷物周施所／越中国伏木湊中道町／柴野平右衛門」。	高岡市伏木北前船資料館
8	「各地米価高低比較表」	1882年(明治15)11月～83年12月	16	東京の渋沢商店(栄一の従兄・喜作が経営)が発行した毎月の米価表。上が正米(現物米取引)相場で東京・大阪等7ヶ所に伏木(越中新米)が含まれる。下が定期(決済日を定めておく取引。途中の売買可能)米相場	当館 (堀田一善氏)
9	仕切記(繰綿)	1873年(明治6)6月付	1	大坂の三島又三郎が、伏木の3代八坂金兵衛(金平)に、繰綿(種を取っただけの未精製の綿)2種計42本を357円で売却した証文。末尾の「御支配 泉弥平」は大坂堺の商人で、保証人として名を連ねている	当館 (今井昭次氏)
10	売仕切(昆布)	1877年(明治10)10月9日	1	函館の井村利平が、堀田家持船の徳衆丸の船頭・儀助に、釧路昆布504駄(約13t)を409円14銭7厘で売却した証文	当館 (堀田一善氏)
11	胴鯡送り状	1881年(明治14)9月14日付	1	堀田善右衛門と高岡袋町・灰屋(平能)五平が古平港(北海道古平町)の歳井旧七、及び徳衆丸儀助(堀田持船船頭)と嘉徳(加得)丸茂平(灰屋持船船頭)に購入させた、胴鯡(食用の身欠鯡を取った後に干した肥料)千束(約7.5t)の納品書。実際の運搬は富山小島町・阿部為義所有の七福丸作之丞が担当している	当館 (堀田一善氏)

12	北海道産物会所用達申付状 (藤井・車屋・靄屋宛)	1871年(明治3)8月付	1	開拓使(新潟出張所)北海道産物会所が、いわゆる「御用達」商に命じたもの。宛先は伏木湊の藤井(能登屋)三右衛門(能三)、車屋(八坂)金兵衛、靄屋(堀田)善右衛門の3名。この3家が当時の伏木を代表する廻船問屋であり、これまで多くの北海道の産物を商っていたことがうかがえる	当館 (今井昭次氏)
13	「船主祈願書」	1876～82年 (明治9～15)	1	堀田家の縁戚・八坂家(車屋)に伝来する文書。高岡市西田の国泰寺(現臨済宗国泰寺派本山)の勸進(航海安全・商売繁盛祈願)に応じた北前船主たちの連名簿。明治9・11～15年の6期にわたり、船名46艘と船主名が列記されており、情報の少ないこの時代の貴重な史料である	当館 (今井昭次氏)
14	表「船主祈願書連名」(複写)		1	上記史料内容を正和氏が表化。明治9年をみると、八坂金平は最多の7艘、堀田善右衛門は平能五兵衛と共に4艘の2位タイである	正和勝之助著『越中伏木湊と海商百家』(桂書房、1995年)p300表を一部改変
15	船中名号	江戸末～明治前期	6	八坂家資料。船中での本尊。八坂家が所有する北前船5艘の各船名(国栄丸・住恵丸・瑜力丸・貴宝丸・大祥丸)が記され、中央・右には六字名号「南無阿弥陀仏」(祐天大僧正)の刷物が貼られている。祐天(1637～1718)は徳川綱吉・家宣らの帰依を受け、1711年増上寺36世・大僧正となった。六字名号を書いて頒布し、奈良・鎌倉の大仏を修補し、多くの廃寺を復興した。生き仏として熱狂的に崇拜されていた	当館 (今井昭次氏)
16	『伏木港』	1939年(昭和14)	1	伏木町役場発行。町の概要から港の詳細なデータ、伏木町全図や町の各種スポットの写真などが一枚に収められている	当館
17	『伏木港平面図』	1939年(昭和11)	1	製図：内務省伏木港修築事務所、発行・印刷：小間義雄。川の深さや碇泊地が黒い船舶の記号で描かれ、臨港工業地帯を背後にした伏木港が小矢部川の「河口港」であった状況がよくわかる	当館
18	「昭和十年主要貨物比較図表」	1939年(昭和11)	1	『伏木港』(昭和11年版、伏木町役場発行)より	当館 (堀田光子氏)
19	「昭和十年伏木港之内国貿易」	1939年(昭和11)	1		当館 (堀田光子氏)
20	「昭和十年伏木港之外国貿易」	1939年(昭和11)	1		当館 (堀田光子氏)
21	引札「旅館／越中伏木停車場真向 岩坂権三郎」		2	「北海道／直江津 各港行／日本郵船会社 各汽船会社／汽船乗客切符并ニ荷物取扱所／旅館／越中伏木停車場真向／岩坂権三郎」	高岡市伏木北前船資料館
22	引札「船荷取扱／越中国伏木湊 辻久左衛門」	1882年(明治15)11月11日	1	1883年(明治16)の暦付。82年の年末に取引先に配った	高岡市伏木北前船資料館
23	引札「旅館／越中国伏木中道町 上田佐右衛門」		1	「直江津新潟酒田土崎函館／小樽樺太其他各港行／日本郵船会社并ニ諸会社乗客切符／其他貨物取扱所／旅館／越中国伏木中道町／上田佐右衛門」	高岡市伏木北前船資料館
24	引札「伏木中道町 紺谷與右衛門」(複写)		1	「八百屋物／あらもの／砂糖類四十物類／酒蠟燭品々／御茶／并漬物類」伏木中道町 紺谷與右衛門	原本：高岡市伏木北前船資料館
25	引札「熊谷旅館 伏木停車場前 あさひ館／米穀肥料仲買・委託販売問屋 熊谷支店回漕部」(複写)		1	「日本郵船会社 北海道行／諸会社汽船 直江津行／来客切符并ニ荷物取扱所／熊谷旅館 伏木停車場前 あさひ館／米穀肥料仲買・委託販売問屋 熊谷支店回漕部」	当館

26	引札「越中伏木港中道町定塚三右衛門」(複写)		1	「日本郵船会社汽船乗客切符周施所／諸国／廻船問屋／旅人御宿／回漕業／越中伏木港中道町中程／定塚三右衛門／汽船帆前和船扱所」	原本：高岡市伏木北前船資料館
			1	「諸商廻船問屋／日本郵船会社／蒸汽船周旋屋／御定宿／定塚三右衛門」。寄港地が記載	原本：高岡市伏木北前船資料館
27	引札「越中国伏木港中道町柴野平右衛門」(複写)		1	「汽船／帆船／和船／切符／周旋所／御休宿所／越中国伏木港中道町／でんしんきよく／まえのはしづめ／柴野平右衛門」	原本：高岡市伏木北前船資料館
			1	「汽船／帆船／和船／切符／并ニ／荷物等取扱所」 「御休泊所／越中国伏木湊中道町／でんしんきよく／まえのはしづめ／柴野平右衛門」。各地の地名、汽車案内などが記載	原本：高岡市伏木北前船資料館
28	正米・胴鯨等積荷商品相場表(伏木中道町・柴野平右衛門)(複写)		1	正米、胴鯨、石油松、黒砂糖、筵等の相場が記載	原本：高岡市伏木北前船資料館
29	引札「越中伏木本町 中嶋万四郎」(複写)	1898年(明治31)	1	「酒醸造所 越中伏木本町 中嶋万四郎」。1899年の暦付。	原本：高岡市伏木北前船資料館
30	引札「越中伏木停車場真向岩坂権三郎」(複写)		1	「北海道／直江津／各港行／日本郵船会社 各汽船会社／汽船乗客切符并ニ荷物取扱所／旅館／越中伏木停車場真向／岩坂権三郎」	原本：高岡市伏木北前船資料館
31	引札「越中伏木湊 栗田吉左衛門」(複写)		1	「海陸回漕店 越中伏木湊 栗田吉左衛門」	当館
32	引札「越中伏木港 丸田庄吉」(複写)		1	「船問屋并ニ荷物取扱 越中伏木港 丸田庄吉」	当館
33	引札「伏木港海岸通り 定塚三右衛門・同回漕部」(複写)		1	「各汽船会社専属荷客取扱店 漁夫人夫募集依頼ニ応ズ／伏木港海岸通り 上三館 定塚三右衛門・同回漕部」。小包の改正料金表が記載	当館
34	引札「伏木港字港町川キワ井上才忠」(複写)		1	「日本同盟大旅館／内外各港行来客荷物取扱店／北海道／カラフト／浦塩斯徳／開墾移住民／漁業人夫坑夫周旋所／富山県伏木港字港町川キワ／井上才忠／ステーション真向／日本郵船株式会社フゾク旅館」	原本：高岡市伏木北前船資料館
35	『中越商工便覧』掲載 伏木の商店(複写)	明治21～22年(1888～89)	4	伏木にある29の商店が掲載	高岡市古書古文庫シリーズ第六集『中越商工便覧(高岡市関係)』(発行・高岡市立中央図書館)
36	和磁石		2	逆針と本針。和(船)磁石は、十二支を目盛った指針型で、本針(十二支を子から時計回りに目盛ったもの)と、方位が船の進行方向を指す逆針(本針とは逆回りに十二支を目盛ったもの)の2種類があり、通常は両方が船に備えられていた	当館(本針)、高岡市立伏木小学校
37	遠眼鏡		1	航海の際に使用した望遠鏡。	当館
38	羅針盤		1	磁石の針が南北を示すことを利用して船の進む進路や方角を測るためのもの。木枠の中に入れて常に水平を保つようになっている	向榮一郎氏
39	八角時計(船時計)	明治期	1	(アメリカ)セス・トーマス社製。日本には1873年(明治6)以降に輸入された。揺れる船の中でも、また机の上でも壁にねじれて付けても動くところから、船時計ともよばれた	当館

40	北前船模型(複製)		1	船模型は、船を新造するときに造船所から船主に贈られるものだという	高岡市伏木北前船資料館
41	船額「海龍」		1	堀田家所有の船「海龍丸」の船額と考えられる。堀田家には他に「栄寿」、「積善」の2枚の船額がある	当館 (堀田一善氏)
42	海上安全護符	1867年(慶応3)	1	「護摩札」ともいい、航海の無事を祈願した木札	当館 (堀田一善氏)
43	写真「幸生銅山 御用銅職」(複写)	江戸末期	1	幸生銅山(現・山形県寒河江市)から銅を運ぶ際に、加賀藩から命を受けた靄屋(堀田家)善右衛門の船が掲げたものという	『高岡市史』中巻(1963年)より/原資料:堀田家蔵
44	船往来手形	1870年(明治3)	1	金沢藩が発行し、堀田家(靄屋)の船が各地の港に入るときに用いた通船許可証。高岡町奉行所から村肝煎へ交付され、船主へと渡された。左側面に「射水郡伏木村靄屋善右衛門名代」とある	当館 (堀田一善氏)
45	風説書(後欠)	江戸時代末期	1	八坂家(車屋)伝来。元治元年(1864)8月の四国連合艦隊下関砲撃事件について書かれている。長府藩(長州藩の支藩)より「地雷火伏せ」攻撃があったので、異人達に多く損害があり、即死400人ばかり、怪我人の数は知れない。長州側の即死・怪我人は少々などある。しかし、実際の連合艦隊側の死者は12人、負傷者56人である。この史料は後半部が欠損しており、年代・差出・宛先などが不明だが、一部にはこのような情報が流布していた可能性がある	当館 (今井昭次氏)
46	本多政質銀子借用証文(靄屋善右衛門宛)	享保元年(1716)7月12日付	1	加賀藩士の最高位「八家」(年寄)の本多家(5万石)4代・政質の靄屋(堀田)善右衛門より銀4貫目(約4~500万円)の借用証文。政質は、正徳5年(1715)12月に安房守に任じられたが、故あって翌年2月に君命により周防守に改めた。その御礼行列の金沢出発、及び江戸入りの豪華さが評判となった(『享保年間記』)。そのため出費がかさんだとみられる。堀田家文書最古の史料	当館 (堀田一善氏)

◆堀田善衛の伏木原像

◇伏木の町と風景

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先(寄贈者)
47	伏木地区の居宅絵図(複写)	明治期	1	明治期における伏木地区の商店、廻船問屋等が記載された居宅絵図	正和勝之助著『越中伏木湊と海商百家』(桂書房、1995年)付属図(部分)に加筆
48	大日本職業別明細図のうち「富山県」(高岡市及び周辺地図)	1925年(大正14)	1	高岡市街・伏木・氷見・新湊周辺の商業施設地図。伏木湊町に「堀田」と記載がある	当館
49	絵葉書「(越中伏木)伏木橋附近の工業地 其三」(複写)	1918~32年(大正7~昭和7)頃	1	伏木橋付近に立地する工場が写された写真絵葉書。伏木築港の完成は、港の豊富な水力と安い電源により、数々の伏木臨港工業地帯が形成されていく契機となった	当館
50	絵葉書「伏木港全景 埠頭ヨリ眺タル伏木港」(複写)	大正期	1	港内に大きく帆を広げた北前船と蒸気船が行き来する風景を写した写真絵葉書。北村書店発行	当館

◇堀田家小史

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先(寄贈者)
51	写真「伏木神社」(複写)		1	伏木東一宮(1883年神明宮より伏木神社と改称)。伏木港の繁栄により、北前船主らが海上安全を祈って鳥居や灯籠、玉垣などを奉納した	当館

52	写真「伏木神社灯籠に刻まれた寄進者名」(複写)	1819年(文政2)9月寄進	1	伏木神社の灯籠(1対)に寄進者17名が刻まれる。竊屋(堀田)善右衛門、車屋(八坂)半兵衛の名が見える。石工は赤間関の小倉清八	当館
53	写真「堀田家菩提寺 孝徳山西念寺」(複写)		1	西念寺は、氷見の南大町にある浄土宗寺院。堀田家の菩提寺。後醍醐天皇の皇子宗良親王ゆかりの創建伝説もある	丸山珪一氏
54	写真「孝徳山西念寺 堀田家の墓」(複写)		2	右は堀田本家、左は分家の墓。本家の墓は、「中興の墓」とされ、大正6年12月、堀田善右衛門(7代)によって建立。分家の墓は、分家の祖・堀田善九郎によって大正7年5月に「累代墓」として建立された。氷見の大火のあと、寺域を貫いて町道が通り、墓域が狭い	丸山珪一氏

◇堀田家の土地と建物

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先(寄贈者)
55	「越中国資産較」(複写)	1890年(明治23)	1	越中国(富山県)内における資産家番付表。左列の射水・砺波郡の最上段に「堀田善右衛門」、中央部の「行司」には「八坂金平」の名がある	個人
56	『中越商工便覧』(初版)	1888年(明治21)	1	富山県内の各種商店170店の外観が銅版画により描かれている冊子。商家の表構えとともに、屋号、家印、営業種目や由緒、宣伝文など多くの情報が記載されている。「堀田善右衛門商店」もみられる	当館
57	写真「堀田善右衛門君 米穀肥料商店」(複写)	1910年(明治43)	1	1889年、堀田家は河港近くの伏木湊町に事務所兼倉庫として「堀田善右衛門商店」を開設した。1919年(大正8)には合名会社となった	『富山県官民肖像録』(有終社、1910年)
58	「伏木本町地引絵図」(部分、複写)		1	伏木本町の宅地、地番などが記されたもの。本資料中の本町37・38・39番地には堀田家旧邸があったといわれる	当館
59	「伏木湊町地引絵図」(部分、複写)		1	伏木湊町の宅地、地番などが記されたもの。本資料中の港町30番地には、堀田善右衛門事務所があったといわれる	当館
60	絵葉書「伏木等の諸商標」(複写)		1	伏木地域の商店や問屋などの商標を1枚の絵葉書にまとめたもの。中央には伏木港の写真も入っている	丸山珪一氏
61	写真「丘の上の『新しい家』」(複写)		1	堀田家は、大正末年に伏木郊外の丘の上(一ノ宮高台)に家を建てて引っ越した	丸山珪一氏
62	写真「堀田楽器運動具店」(複写)	1926～34年(大正15～昭和9)頃	1	1907(明治40)年に創業した伏木・堀田店の金沢支店。主に学校、官庁、軍隊や工場を相手に文具、楽器、運動具などを販売した。当主は堀田呉吉(1870～1934。のちの8代善右衛門)である。1926(大正15)年には合資会社となり、「堀田楽器運動具店」となる	『旧制四高青春譜』(第四高等学校同窓会編、1986年)

◇広告と美術品売立目録

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先(寄贈者)
63	引札「諸廻船問屋 越中伏木港 堀田善右衛門」	1886年(明治19)	1	廻船問屋・堀田善右衛門の引札(明治20年の暦付)。取引先に配り、翌年に掲示してもらうことを目的とするため、暦がついている	当館(堀田一善氏)
64	引札「廻船問屋・回漕店 越中伏木港 麦谷十平」	1888年(明治21)	1	伏木港で、廻船問屋・回漕店を営む麦谷十平の引札(明治22年の暦付)	高岡市伏木北前船資料館

65	写真「堀田善右衛門商店広告」(複写)	1915年(大正4) 1916年(大正5)	2	発行・伏木商工会。「廻船問屋倉庫業」、「廻船問屋倉庫業・代弁業」とそれぞれ記載がある	『大正四年伏木統計表』(伏木商工会、1915年)、『大正五年伏木統計表』(同会、1916年)
66	写真「合名会社堀田善右衛門商店広告」(複写)	1920年(大正9)	1	発行・伏木商工会	『大正九年伏木統計表』(伏木商工会、1920年)
67	『越中伏木港堀田氏蔵品入札勢利目録』	1920年(大正9)4月	1	堀田家の所蔵品売立目録(写真付)。入札(勢利=競り)は、同年4月5日に金沢・下近江町にある金沢美術倶楽部で行われた	富山県立伏木高等学校

◇父野口勝文とその仕事

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先(寄贈者)
68	写真「堀田勝文」(慶応大学卒業アルバム)(複写)	1910年(明治43)3月	1	堀田勝文(1885~1952)は、幕末期、吉久で加賀藩御蔵番役人を務めた野口家の出身。父・野口忠五郎と母・あしの三男。魚津中学を経て、慶応義塾大学の理財科を1907年(明治40)に卒業後、1911年くにの婿になった	原本：慶応義塾福沢研究センター
69	写真「堀田勝文」(複写)	1952年(昭和27)頃	1	善衛が芥川賞を受賞した際に撮影された家族写真より	高岡 野口家
70	棟方志功書簡(堀田勝文宛)	1950~51年(昭和25~26)頃	1	当時福光に疎開していた世界的板画家・棟方志功(1903~75)が堀田善衛の父・勝文に宛てた作品鑑賞への礼状。福光出身の日本画家・石崎光瑠(1884~1947)のことを「和善息子先生」としており、伏木に回漕店を出していた実業家・石崎和善と志功、及び堀田家とのつながりもうかがえる。また、善衛の自伝的小説『若き日の詩人たちの肖像』(1968年)には、光瑠が堀田家に長期滞在して、母くへの絵の先生をしていたことや、善衛も習わせられたが、下手で呆れられてしまった逸話がみられる	当館(堀田一善氏)
71	写真「石油基地前の埋め立て地」(複写)	1948~53(昭和23~28)年	1	望楼を備えた堀田家が写っていることが今回初めて確認された写真。写真の右端中央に見えるのが、伏木本町38番地で、かつての堀田家邸宅があった場所	『保存版ふるさと高岡』(郷土出版社、2009年)
72	伏木埋立土地株式会社株券	1928年(昭和3)7月1日付	8	堀田善衛の父・勝文の同社の各種株券8枚、計345株6900円分。勝文は伏木外港(湊町~岩崎の43ha)の埋め立てを構想し、1924年に同志と共に起工を申請し、2年後に認可された。1928年8年、同社は正式に設立された(資本金50万円)。しかし、工事は激浪に何度も阻まれ難航。1935年(昭和10)、予定の2割しか埋め立てられず、施工業者の飛島組(現飛島建設)にその権利を売却し、同社は解散した	当館(堀田一善氏)
73	伏木埋立土地株式会社関係資料	1929~30年(昭和4~5)	4	「混泥土方塊製作数報告」(昭和4年、伏木埋立(株)出張所より同社宛)、「伏木港埋立護岸工事工程御届」(同年、飛島組より伏木埋立(株)伏木出張所宛)、「護岸根固用捨石搬出終了届」(同5年、伏木埋立土地(株)より知事宛)、「請求書」(同年、三協組(代表者・八阪金平)より伏木埋立土地(株)宛)	当館(堀田一善氏)
74	伏木埋立甲種護岸変更設計図	1931年(昭和6)頃	1	1929年5月に着工されたが、激浪に流され変更にくぐり変更をせざるを得なかった。これはコンクリートブロックを用いた防波堤の断面図。しかしこの防波堤も、1933年12月7日の高波で流された。激浪を和らげる流線形の防波堤に改造された(防波堤の通称が「流線形」となった)。そして1935年7月によりやく新しい防波堤が完成した	当館(堀田一善氏)

75	「伏木外港埋立計画図」(複写)	昭和初期	1	伏木外港の埋立計画図	『伏木港史』(伏木港史編さん委員会、1973年)
76	埋立工事実施施行変更願	1931年(昭和6)	1	「伏木埋立変更第一期工事実施設計書」のうち。埋立工事は1929年5月に着工されたが、激浪に流され、わずか2ヶ月後に第一期工事予定範囲を半分にするなど、その後も変更により変更をせざるを得なかった	当館 (堀田一善氏)
77	写真「石油タンクの並ぶ風景」(複写)		1	「銀の壁」が立ちはだかつて丘の上からも海が見えなくなったという母くこの嘆きを表す風景。埋立に邁進した勝文の海と格闘したあの努力は何だったのかという思いがこもっているようだ	丸山珪一氏
78	正力松太郎書簡(堀田勝文宛)	1923年(大正12)4月14日付	1	実業家・政治家の正力松太郎(1885～1969)から勝文宛。当時、警視庁官房主事であった正力が、勝文からの浦田政則という人物の採用依頼に対する回答文である。射水市(旧大門町)出身の正力は、善衛の伯父・淳吉の東大・警視庁の後輩であり、警視庁に勤めた従兄・務の先輩にあたる。正力が1934年(昭和9)日本最初のプロ野球団大日本東京野球倶楽部(現・読売巨人軍)を創設した際、務を引き抜き運営を任せられた。務は日米野球の実現、野球連盟創設、天覧試合の実現に奔走するなど、生涯プロ野球の振興・発展に尽力した	当館 (堀田一善氏)

◇母くにとその仕事

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先 (寄贈者)
79	写真「堀田くに」(石川県立高等女学校時)(複写)	1901～04年(明治34～37)頃	1	お嬢さん育ちで、マッチ一本すったことのなかった彼女もここで実際の判断力を養い、人から頼られる存在となった	北國新聞編集局編『済美に集う一石川県立金沢第一高女の光陰一』(北國出版社、1981)
80	写真「荷役作業に従事する女仲仕たち」(複写)	1935年(昭和10)頃	1	伏木の港で荷役作業に従事する「女仲仕」たちの様子。大正期頃、伏木の港では低賃金で女性たちが石炭や米、肥料などを背負い、倉庫から船へと荷積み作業に従事し、港に動力整備が導入されはじめる昭和初期頃まで続けられた	高岡市
81	写真「土を積み大八車を引く婦女会員ら」	1975年(昭和50)	1	伏木保育園前庭のくこの胸像横に設置されたレリーフのブロンズ(永原廣作)。1933年(昭和8)、園舎新設のための地盛作業に従事した婦女会員らの様子を表す。託児所開設50周年記念に伏木保育園母の会が寄贈した	当館
82	写真「堀田くに胸像」	1981年(昭和56)	1	伏木保育園前庭に設置されているくこの胸像。辻志郎作	当館
83	写真「晩年の堀田くに」(複写)		1	くには1981年(昭和56)まで伏木保育園の園長を務めた。「子どもは親の子と同時に『社会の子』』と考えていたくには、保育事業・母子福祉に生涯をささげた。享年97	高岡 野口家蔵
84	写真「念仏堂の託児所」(複写)	1926年(大正15)	1	高岡市伏木東一宮にある念仏堂境内に託児所が開所した際に撮影された記念写真。1923(大正12)年、くには働く母親たちのため、堀田家ゆかりの尼寺・念仏堂に間借りして、子どもを無料で預かり始めた	原本：高岡市
85	写真「現在の伏木保育園」	2018年(平成30)	1	1933年(昭和8)、これまでの念仏堂から現在地(高岡市伏木本町)に移転し、保健師を常駐させるなど健康相談所としても多くの人々に利用された。1958年(昭和33)には「社会福祉法人伏木保育園」と改称	当館
86	伏木町託児所案内(複写)	1926年(大正15)	1	伏木町婦人会により、伏木東一宮の念仏寺境内に設けられた託児所の利用を呼びかける案内チラシ。同年、遊戯室を建て、県内初の施設託児所である「伏木町託児所」を開き、初代所長になった	原本：伏木保育園

87	伏木託児所の葉	1942年(昭和17)	1	伏木託児所の沿革、目的、託児要領などが記載	当館
88	堀田くに著『堀田家の昔話』(複写)	1965年(昭和40)8月27日	1	今回の新発見・初公開となる資料。この前年に、くには勲五等宝冠章を受章した。おそらくそれを機に、何か家の歴史や自分の生涯を振り返る文章を依頼されたのであろうか、その原稿かとも思われる。11ページには善衛が北海道礼文島の宿で堀田家の「こよみ」(引札)が貼ってあるのを見たと言った話も書かれている	当館 (堀田一善氏)
89	正力松太郎書簡(堀田くに宛)	1957年(昭和32)10月4日付	1	実業家・政治家の正力松太郎(1885~1969)からくに宛(代筆)。前立腺肥大により東大病院に入院した正力に対し、善衛の母・くにが送った見舞状に対する礼状	当館 (堀田一善氏)
90	岩倉規夫書簡(堀田くに宛)	1964年(昭和39)12月15日付	1	くにの勲五等宝冠章受章を祝う書簡。岩倉(1913~89)は官吏。東京生まれ。小学校から旧制高校卒業まで高岡市中川で過ごす。内閣書記官、賞勲部長、総理府総務副長官、国立公文書館初代館長などを歴任。富山の歴史・文化などに関心を寄せ、幻の書『越の下草』翻刻・刊行に尽くした	当館 (堀田一善氏)

91	写真「第六代堀田善右衛門」(複写)		1	善衛の曾祖父で、名は八郎平(1826~1905)。八坂家次男として生まれるが、堀田家に養子として入り、堀田の家業を継ぎ、中興の祖と言われるまでになった	正和勝之助著『越中伏木湊と海商百家』(桂書房、1995年)
92	写真「第七代堀田善右衛門」(複写)	1909年(明治42)	1	善衛の祖父。名は善五郎(1846~1924)。活動的な人で家業の拡張だけでなく、伏木の行政にも積極的に関わった	原本：高岡市伏木氣象資料館
93	写真「伏木測候所新庁舎完成記念式典」(複写)	1909年(明治42)	1	伏木測候所新庁舎完成記念式典で撮影された集合写真。写真最前列の左から4人目が第7代堀田善右衛門(善五郎)、その右隣が伏木の近代化に貢献した藤井能三。伏木測候所は、1909年(明治42)に伏木町臥浦字享田(現伏木中央町)から伏木町古国府字東館(現高岡市伏木古国府)に移転建築された	原本：高岡市伏木氣象資料館
94	写真「伏木銀行」		1	創業1896年(明治29)。6代堀田善右衛門(八郎平)が音頭を取って伏木中道に創設。初代頭取でもあった(取締役は4代八坂金平)。1910年(明治43)、建物は伏木湊町に移転・新築された。高岡市で数少ない和洋折衷スタイルの銀行建築で、現在は高岡商工会議所伏木支所になっている	個人
95	米、鯨相場等に付書簡	年未詳11月13日付	1	堀田善五郎(のち7代善右衛門)から父の6代善右衛門(八郎平)と3代八坂金平(八郎平兄)宛。おそらく大阪にいる善五郎が米や鯨の相場を伝え売買の報告や判断を仰いでいる。堀田家と八坂家が商売上も強いつながりをもっていることを示す。また冒頭に暗号のような片仮名文がある。そして、端裏に堀田家の船標もある	当館 (堀田一善氏)

◆堀田家の親族群

◇親族・八坂家

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先 (寄贈者)
96	写真「三代八坂金平」(複写)		1	伏木の船卸商。高岡米商会所頭取。俳号喜宣、宗和流の茶人でもあった。生年未詳。1894年(明治27)8月18日没	『富山県官民肖像録』(有終社、1910年)
97	写真「八坂金平氏米穀肥料商店」(複写)	1910年(明治43)	1		『富山県官民肖像録』(有終社、1911年)

98	東北鉄道会社募資依頼状 (八坂(坂)金平宛)	1881年(明治14)10月26日付	1	幻の「東北鉄道」計画を示す資料。加賀前田家15代の利嗣が3代八坂金平に宛てた寄付願い状。敦賀から富山・新潟方面への路線が計画された、「東北鉄道会社」(京都よりみて東北の意)は、北陸の旧藩主や東西の本願寺門主らが出願し、北陸の人々に寄付を募った。しかし、政府は福井―三國―金沢―伏木間を認可するも、難工事が予想される、敦賀―福井間を不認可とした。そのため福井方面の発起人が脱退し、明治17年に挫折した	当館 (今井昭次氏)
99	宗和流茶礼風炉台子免状	1890年(明治23)10月付	1	金沢の茶道「宗和流」10代・九里歩一蓬(1820～92)より八坂金助(祐)宛。堀田6代善右衛門の二男・金助(1848～1929)は、1862年、3代八坂金平の養子となり、1895年に同家4代金平を襲名する。八坂家文書には宗和流の文書類が多く含まれている	当館 (今井昭次氏)
100	第四代八坂金平編 俳諧連歌撰集『奈呉の浦風』	1895年(明治28)	1	第4代金平は、堀田家7代善右衛門の弟。跋文によれば、一年前に亡くなった先代金平の法事に加え、茶菓と詩歌をもってする盛大な追悼の集まりが催され、これはその折の俳諧連歌の記録である。八坂・堀田両家総動員と推定されるが、残念ながら全員が俳号のため特定できない。発句の喜宣居士は先代の故金平だが、それを受けた松堂が4代金平であることは間違いなからう	高岡市立中央図書館
101	『伏木港八坂金平氏所蔵品売立目録』	1930年(昭和5)	1	高岡片原町の超願寺で行われた八坂家の所蔵品売立目録	当館

◇親族・稲垣家

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先 (寄贈者)
102	写真「稲垣示」(複写)		1	稲垣 示(1849～1902)は現・射水市出身の自由党系の政治家	櫻木成一著『自由民権先覚者稲垣示物語』(1978年)
103	写真「稲垣示銅像」(複写)		1	1915年(大正4)、園内小竹藪に造立(供出され現存せず)。原型・中野双山(高岡大仏の作者)。鑄造・山岸栄次郎。台座は暫く残った	高岡 野口家
104	記事「稲垣 示氏の創傷」(複写)	1897年(明治30)4月30日付	1	示は1897年4月25日、東京神田にて林田友則(熊本県出身の壮士)に切り付けられ、頭部5ヶ所を負傷した。すぐ神保町の神保病院に入院した(5月11日退院)	『北陸政論』
105	稲垣示宛稲垣篤書簡	[1897年(明治30)] 4月27日付	1	稲垣 示が東京で襲われた記事を見て驚いた息子の篤からの見舞状。直ぐに電報で問い合わせると軽傷とのことで安心したが、頭部なので、「保養専一」にと伝えている。封筒の裏には「於伏木」とあるように、当時篤は母の実家・堀田家の持ち家に住まいしていた	当館
106	【参考】稲垣示宛稲垣篤書簡封筒	[1897年(明治30)] 4月27・31日付	2	左封筒(27日付)の裏にはスタンプで「越中国伏木港／堀田商店回漕方」とあり、右封筒(31日付)には、「(墨書)伏木港／(朱印)堀田善九郎(墨書)方」とあるように、当時篤は母の実家・堀田家の分家、善九郎(6代善右衛門息子)が営んでいた堀田商店回漕方に住まいしていたことがわかる	当館
107	仙波兵庫宛稲垣示書簡	1897年(明治30)5月11日付	1	1897年4月25日、稲垣 示は東京で襲われ、神保病院に入院した。頭部に五か所の傷を負ったが、5月11日に退院した。これは入院中に見舞いお礼と本日退院したことを知らせる葉書である。宛先の仙波兵庫(宛所不明で返送)は現在の茨城県桜川市出身。1884年の加波山事件で逮捕された過激な自由党系政治家	当館
108	記事「稲垣示君の逝去」(複写)	1902年(明治35)8月10日付	1	稲垣 示の逝去を大々的に報じた記事。遺族と同じ文字の大きさで、堀田・八坂の本分家の名がある	『北陸政論』

109	写真「稲垣八重」(複写)		1	稲垣八重(1852～1919)は、示の妻で、6代堀田善右衛門の長女	高岡 野口家
110	記事 稲垣八重の手記(複写)	1887年(明治20)9月30日付	1		『大阪日報』
111	写真「稲垣良之助」(複写)		1	稲垣良之助(1868～1917)は、示の弟。父・又平と、母・もとの三男として生れた	高岡 野口家
112	写真「稲垣良之助とその家族」(複写)		1	写真向かって左より、稲垣示の妻・八重(1852～1919)、示の弟・良之助(1868～1917)、示の母・もと(1831～1918)、良之助の妻・るい、良之助の長女・田鶴子	高岡 野口家
113	記事「稲垣篤氏の送別会」(複写)	1899年(明治32)11月7日付	1	稲垣篤(1877～1933)は示の長男。東京外国語学校ロシア語科で学んだ後、ロシア・樺太島へ渡航するにあたり開かれた送別会について報じた記事	『北陸政論』

◇親族・野口家

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先(寄贈者)
114	写真「野口忠五郎」(複写)		1	忠五郎(1840～1920)は能町小学校で校長(1891～96)をし、その前にも後にも伏木小学校の訓導として長年教えた	高岡 野口家
115	写真「野口忠五郎・みし夫妻」(複写)		1	広島に住む忠五郎の甥・野口遵(1873～1944)のもとで撮られた写真	高岡 野口家
116	写真「野口三兄弟」(複写)	明治後期	1	写真左より長男・詮太郎、三男・勝文(中央)、次男・淳吉	高岡 野口家
117	写真「軍医監・野口詮太郎」(複写)		1	野口詮太郎(1870～1934)は、忠五郎長男。陸軍幼年学校を出て、第四高等学校医学部を卒業1917年(大正6)には軍医監になり、翌々年予備役。西宮回生病院の経営に関わった	高岡 野口家
118	写真「野口淳吉」(複写)		1	野口淳吉(1880～1919)は、忠五郎二男。1906年(明治39)東京帝大(現・東京大)法学部卒業。警視庁警務部長を務めた。1917年(大正6)10月に分家した	高岡 野口家
119	記事「野口局長逝く」(複写)	1919年(大正8)9月6日付	1	野口淳吉は、朝鮮総督府警務局長に任命され、東海道線で任地に向う列車内でチフスを発病。途中下車し、兄・詮太郎の病院に入院するが、1919年9月5日死去(享年40)。温厚な人柄や不慮の死をむかえた家族の状態などが紙面から伝わってくる。部下だった正力松太郎が淳吉の子・務と清の手を引いてかけた	『高岡新報』
120	写真「野口務」(複写)	1930年代(昭和5～14年)頃	1	淳吉の長男・務(1907～93)は二つの顔を持っている。一つは、プロ野球巨人軍の礎を築いた人として、いま一つは左翼社会運動の記録者として。前者は、何冊かの著書で知られているが、後者はその全体像の研究がなお待たれている。若き日の早い社会意識の目覚めは、幼年期から青年期にかけての善衛に強い影響を与えた。善衛の11歳上である。『若き日の詩人たちの肖像』の『従兄』はこの人がモデルだが、身近な人だけに虚実交々といったところか。佐野真一『巨怪伝』(正力松太郎伝)にこの人のインタビューがある	高岡 野口家
121	写真 四高ビラ「全学生諸君に檄す」(複写)	1926年(大正15)4月	1	この時期、務は四高社会科学研究会のリーダーだった。彼はのちに手帳と確かな記憶に基いて少なからぬ回想の文を残したが、かつて彼自身が書いたと推定しうる文はあまりない	原本：石川県立歴史博物館
122	写真「野口家・堀田家の子どもたち」(複写)	大正末期	1	善衛不在が惜しいが、野口家と堀田家の子どもたちが揃った写真。後列右から善朗と善二、市川定興(善衛の父・勝文妹かおるの子)、前列左から信子と清である。くになが「三男一女」と呼んだように、野口家から預かった信子を自分の娘として育て、学校へやり、嫁に出した	高岡 野口家

123	写真「高岡中学校野球部時代の野口清」(複写)	昭和初期	1	善衛と同年で学校でも同期であり家も近く、おそらく一番親しい遊び友達だった。清は野球に熱中した。善衛が金沢の二中で野球部マネージャーをしたことがあるのもその影響かもしれない。『一本の道はるかにて』正・続は、幼少年時代の思い出、先祖探究、高岡市役所での仕事などを描く	野口清『一本の道はるかにて』(1983年)
124	写真「堀田善衛とともに埋立地を見る」(複写)	1966年(昭和41)頃	2	『週刊朝日』のルポ「ふるさとを行く⑩高岡篇」(1966年3月発行)を取材するため来高の折、伏木海岸で清といっしょに撮ったものと推定される	高岡 野口家

◇堀田善衛

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先(寄贈者)
125	写真「堀田善衛」(複写)	1952年(昭和27)頃	1	芥川賞受賞時に撮影された家族写真より	高岡 野口家
126	写真「伏木小学校校舎と藤井能三像」	1922～43年(大正11～昭和18)頃	1	本写真の銅像(荒井秀山作)は、1922年(大正11)に伏木小学校50周年記念に造立されたが、1943年(昭和18)に戦争のため供出(台座は南砺市出身の建築家・吉田鉄郎)。現在の銅像(米治一作)は、1952年(昭和27)同校の80周年記念に造立された	高岡市
127	写真「伏木小学校1学年学級」(複写)		1	善衛のいここにあたる野口清が1年生の頃の学級写真	高岡 野口家
128	堀田善衛 作文(複写)	昭和初期	1	伏木小学校では作文に力を入れていた。さまざまな題を与えて書かせた。母くには、善衛が新聞の社説などを読む変わった子だったと言っていたが、善衛が幼い頭を絞ったのも、新聞の社説が材料だったのだろうか。ここには早い社会的関心と平和の希求が示されており、それが家業の営みにもつながっている	『伏木の文化(別冊)』(高岡市立伏木小学校、1956年)
129	「ちいさい頃の生活地図—大正6, 7年」(複写)	1917～18年(大正6～7)	1	伏木小学校周辺の様子が描かれた生活地図。善衛の級友・山口義夫が後に学校から請われて描いたもの。山口は小学生の頃から絵が得意だったという。参考資料その他でしばしば利用されている	『伏木の文化(別冊)』(高岡市立伏木小学校、1956年)
130	写真「伏木小学校6学年卒業」(複写)		1	野口清が6年生の頃の卒業写真	高岡 野口家
131	『昭和四年度版 みなとの学校』	1930年(昭和5)	1	伏木小学校が発行する卒業成績文集。毎年度末に刊行され、卒業児童全員が作文・書・絵などを掲載し、それをもって卒業成績を代表させた。善衛卒業の年度のもの残念ながら現存しておらず、本資料はその前年度に発行されたもの	高岡市立伏木小学校
132	写真 伏木小学校「卒業生台帳」(部分、複写)	1931年(昭和6)	1	同校に保管されている卒業台帳の一部。堀田善衛の成績順位「三」と記載がある。母くには、善衛のことを尋ねに来た人に学籍簿(通信簿)を広げ、「操行(素行)」はいま一つだが、成績はいつも二番で、とくに国語と歴史が優れていたのを見せていたという	原本：高岡市立伏木小学校
133	田河水泡『漫画の缶詰』(復刻版)	1969年(昭和44)	1	漫画「のらくろ」の作者・田河水泡(本名：高見澤仲太郎。1899～1989)のそれに先立つ漫画歴を総括した一冊。初版は1930年(昭和5)、善衛が小学5年生の頃で、いまなお斬新である。善衛は出たばかりのこの本を求めて、親に内緒で伏木から高岡への遠い道のり(片道約8km)を往復したという	丸山珪一氏
134	堀田善衛葉書(山口義夫宛)	1931年(昭和6)6月13日付	1	今回が初公開となる貴重な資料。伏木小学校時代の同級生・山口義夫に宛てた善衛自筆の葉書。末尾に「Zene」とサインをしている。後年善衛に宛てて、改めて自己紹介しながら、長い間大事にしてきた、金沢の二中生になったばかりの善衛のはがきのコピーを送った	個人

135	善興寺 芳名帳（「山峡に ざわめきありて 鮎の宿 蟬声ひびき 故里に近 し」）	1959年(昭和 34)頃	1	堀田善衛が、中国文学者・随筆家の奥野信太郎 (1899～1968)とともに、高岡市中田の善興寺を訪 れた際に書き留めたもの。来富の目的、善興寺訪 問の目的、ともに不明であるが、慶応大卒の二人 は三田文学の集まりなどで親しかったという。奥 野信太郎が上の句を、善衛が下の句を書いてつな ぐのは、連歌の原初形態のごとくで面白い	善興寺
136	堀田善衛自筆色紙		1	「正確なるもの 美しきもの 天体のごとし」。堀 田善衛からいとこ・越野信子氏に贈られたもの。 野口清氏を通じて伏木中学の堀田善衛記念館で ある海風会館に提供され、展示されている	高岡市立伏木中学校 保管
137	堀田善衛書簡(正和勝之助 宛)(複写)	1995年(平成 7)以降	4	伏木出身で郷土史家の正和勝之助(1921～2012)か ら著書『越中伏木湊と海商百家』を贈られた善衛 は、鶴屋を含む情熱をこめた調査渉猟に感動す る。それは自分が経験したり、伝え聞いたりした ことを改めて思い起こさせ、エッセイ「鶴屋善右 衛門」を書いた。二人の間に電話や手紙のやりと りが生まれた	高岡市立伏木中学校 保管
138	写真 堀田善衛自筆扁額 「風はどこから吹いてくる —伏木中学校の歌」(複写)	1967年(昭和 42)	1	1967年の伏木中学校創立20周年を機に校歌の作詞 を依頼された善衛が、校歌ではなく中学生への メッセージ“伏木中学校の歌”としてつくった詩 (詞)。作曲は、團伊玖磨	原本：高岡市立伏木 中学校
139	写真「伏木中学校の歌 CD 歌詞カード」		1	同校が作製した「伏木中学校の歌」のCDに付属し ている歌詞カード	原本：高岡市立伏木 中学校
140	写真 石碑「伏木中学校の 歌(堀田くに直筆)」		1	同校中庭にある、善衛の母・堀田くにが書いた 「伏木中学校の歌」の石碑の写真	高岡市立伏木中学校
141	詩「瀉の風景」(複写)	1947年(昭和 22)初出	1	『個性』(1947年5月号)初出。上海から帰国し、東 京での仕事探しに出かける前に、故郷に滞在。伏 木海岸で書いたと推定される。戦後第一作。上海 経験で古い自己が震撼され、人間として文学者と しての脱皮の願望が表現されている	『堀田善衛詩集— 1942-1966—』(集英 社、1999年)／丸山 瑠一氏
142	短篇「夜来香」	1951年(昭和 26)	2	初出誌は『文学界』(1951年2月号)。『搜索』 (未来社、1952年)にも収録。 「夜来香」は花に寄せる、李香蘭の上海でヒット した恋の歌。小説に行き悩む新人作家の主人公 は、花の香がきっかけとなって、内に生命力を感 ずるようになる。伏木が舞台である。	『文学界』(文芸春 秋新社、1951年)、 『搜索』(未来社、 1952年)／丸山瑠一 氏
143	「鶴のいた庭」	1956年(昭和 31)	2	現在私たちが手にする短篇「鶴のいた庭」の初出 は『香港にて』(1960)である。同題の作品が先ん じて『世界』(1957年1月号)に掲載されているが、 これは長篇小説として意図された、その冒頭部分 であり、末尾に「未完」とあるのはそのためであ る。逗子の自宅が火事になり、長篇続行のための 資料も焼失し、その断念から短篇が生れた	『香港にて』(新潮 社、1960年)、『世 界』(岩波書店、 1957年)／丸山瑠一 氏
144	短篇「黄塵」	1960年(昭和 35)	1	黄塵は中国大陸から吹き寄せる黄砂のこと。先祖 の「鶴屋善右衛門」が寄進した石垣や燈籠を讃岐 の金刀比羅宮にさがす様子が描かれる一方、少年 時の回想のなかに故郷の港町の風景も書き込ま れている。先祖さがしの中で自らの歴史的位 置をさぐる作品	『聲』(1960年夏号) ／個人
145	詩「高岡大仏寺の写真に寄 す」(複写)		1	じっと座り続ける仏の像に、せかせかしている自 分のなかの異なる時間を感じて安らぐ。幼き日の 仏間、木魚を叩く祖母の横に座って見上げていた 仏が詩人の心のなかで重なっているのでは あろう	『堀田善衛詩集— 1942-1966—』(集英 社、1999年)／丸山 瑠一氏
146	写真 詩「高岡の大仏に寄 す」(複写)	1960年(昭和 35)	1	初出の「週刊文春」(1960年6月13日号)に掲載 されたこの詩を見た大仏寺の関係者が母くにと親 しく、くにから善衛に頼み書いてもらった	原本：大仏寺
147	写真「高岡大仏」(複写)	2007年(平成 19)以降	1		高岡市

148	エッセイ「先祖幻想」(複写)	1964年(昭和39)	1	先祖代々の霊魂が乗り移っていたものか、大型のモーターボートで日本の海岸をあちこちしながら、原稿生活を送ろうと夢見ていたが、石原慎太郎に危険だからやめなさいと、ニベもなく宣告された話	『アサヒグラフ』(朝日新聞社、1964年)／丸山珪一氏
149	「北前船主西村屋の人びと」	1965年(昭和40)	1	初出不詳。『歴史と運命』(1966)に収める。書評だが、当主によって実録が残されることの重要性を説き、「私もまた死ぬまでに、裏日本百年間の物狂いを小説に書いたみたい」と結んでいる	「西村通男著『海商三代―北前船主西村屋の人びと―』(1965年)／丸山珪一氏
150	『週刊朝日』連載ルポ「ふるさとを行く⑩」の「高岡」(複写)	1966年(昭和41)	1	「ダム建設が消した? 蜃気楼」。『週刊朝日』のルポを書くために富山へやって来た善衛は、黒部のファスナー工場、漢方薬の池田屋、伏木の埋立地などを見る。久しぶりに家族や友人たちとも会う	『週刊朝日』(1966年)／丸山珪一氏
151	『若き日の詩人たちの肖像』	1966年(昭和41)	2	河出書房新社『文芸』1966年1月号～1968年5月号に連載。1968年9月新潮社刊。主人公の青年の戦時体制下東京での文学的思索と交友を回想する自伝的長篇小説。1930年代後半の東京を主たる舞台とし二人の兄や従兄、伯母などが主人公の周辺に登場する。没落期の生家の事業も書き込まれ、帰省時の故郷や金沢も描かれる。文末の素晴らしい二行詩は、単行本刊行に際して削除された。なぜであろうか	『文芸』(新潮社、1968年)／丸山珪一氏、単行本／当館
152	堀田善衛サイン	1966年(昭和41)	1	『若き日の詩人たちの肖像』に記される。上森子鉄宛。上森(1901～89)はキネマ旬報社長、日本競馬新聞協会会長	個人
153	連載「若き日の詩人たちの肖像」	1968年(昭和43)5月号	1	連載の最終回	『文芸』(1968年)／丸山珪一氏
154	エッセイ「北の海」(複写)	1970年(昭和45)	1	少年時代の自分を形成した、あの荒涼とした秋から冬にかけての伏木の鈍色の海への思い。父の埋立て事業のこの荒れ狂う海との無残な戦い。そこに今や「化石石油タンク」が立ち並ぶ	『ワイドカラー日本・北陸』(世界文化社、1970年)／丸山珪一氏
155	『新潮日本文学47 第35回配本 堀田善衛集』(複写)	1971年(昭和46)7月	1	堀田善衛特集記事が掲載	丸山珪一氏
156	「堀田勝文と小泉信三」	1972年(昭和47)	1	新潮社のPR誌『波』に連載された「私の中の日本人」の一篇を書くに当って、善衛は父を経済学者・小泉信三(1888～1966)との対比のもとに選んだ。古いリベラリズムの克服が彼のテーマだったが、父への愛着が感じられる	『私の中の日本人』(新潮社、1977年)より／丸山珪一氏
157	プレイボーイインタビュー「なぜゴヤか?」	1977年(昭和52)6月号	1	善衛は自分や家族のことについてあまり作品に書かなかったから、対談者やインタヴュー者は、仕事の動機や背景を知るためにも、顔を合わせるとまずそこから聞こうとするようだ。冒頭の数ページは北前船や堀田家の「芸術的雰囲気」に当てられている	『プレイボーイ(日本版)』(1977年)／丸山珪一氏
158	エッセイ「奇妙な一族の記録」	1980年(昭和55)	1	『文芸春秋』1956年6月号に初出。『彼岸繚乱』(筑摩書房、1980年)に収録。「奇妙な一族」とは父の出た野口家のことだが、話はほとんど父のことである。善衛は家族のことをあまり書かなかったが、父についてはその割には書いている。距離感覚がよかったのだろう	『彼岸繚乱』(筑摩書房、1980年)／丸山珪一氏
159	エッセイ「二葉亭四迷氏と堀田善右衛門氏」(複写)	1989年(平成元)	1	二葉亭四迷の住所録に堀田善右衛門の名が出ていると教えられ、その謎を解こうとするのだが、解けない。別のところに堀田家ゆかりの稲垣篤の名も何度か出て来て、想像をたくましくする。	『ちくま』(1989年)／個人
160	エッセイ「鶴屋善右衛門」(複写)	1995年(平成7)	1	伏木生まれの歴史家・正和勝之助氏から贈られた『越中伏木湊と海商百家』(桂書房、1995年)に触発され廻船問屋鶴屋への想いをつづる	「ちくま」(1995年)／個人

◆『広場の孤独』による芥川賞受賞とその反響

No.	資料名称	年代	点数	備考	所蔵先 (寄贈者)
161	堀田善衛 芥川賞受賞記念 家族写真	1952年(昭和 27)	1	堀田善衛が昭和26年度下半期(第26回)芥川賞を受賞した際に東京で撮影された家族写真。善衛は朝鮮戦争下で苦悩する知識人の姿を描いた『広場の孤独』『漢奸』等で1952年1月21日芥川賞を受賞した	高岡 野口家
162	『中央公論・文芸特集』	1951年(昭和 26)9月号	1	「広場の孤独」の連載	丸山珪一氏
163	『広場の孤独』(初版)	1951年(昭和 26)	1	発行・中央公論社	丸山珪一氏
164	『広場の孤独』	1953年(昭和 28)	1	発行・新潮社	個人
165	『広場の孤独 祖国喪失』	1953年(昭和 28)	1	発行・筑摩書房	丸山珪一氏
166	「広場の孤独」台本(故小 沢栄太郎所有)	1953年(昭和 28)	1	俳優・故小沢栄太郎(1909～88)が所有していた台本	丸山珪一氏
167	映画チラシ「広場の孤独」	1953年(昭和 28)	1	同年9月15日に公開	丸山珪一氏
168	『広場の孤独』(豪華限定 版)	1980年(昭和 55)	1	発行・成瀬書房。善衛の署名・印章付	富山県立伏木高等学校
169	グラフ対談「文学賞はも らったが・・・」(複写)	1952年(昭和 27)2月20日号	1	作家・田宮虎彦と堀田善衛の対談記事	『毎日グラフ』(毎日新聞社、1952年)／丸山珪一氏
170	『近代文学』	1952年(昭和 27)5月号	1	発行・近代文学社。「広場の孤独と共通の広場」と題して、堀田善衛芥川賞受賞祝賀会について記載されている	丸山珪一氏
171	本誌掲載写真「遠藤周作よ りの祝いの葉書」	2011年(平成 23)春季号	1	芥川賞受賞に際し、小説家・遠藤周作(1923～1996)から善衛に宛てた葉書が掲載。本誌には1949年5月から1963年12月までに、両者の間でやり取りされた未発表の書簡・葉書の特集記事が組まれている	『三田文学(No. 105)』(2011年)／丸山珪一氏
172	「『広場の孤独』と女性群 像」	1953年(昭和 28)8月	1	インタビュー記事の掲載	『家庭の手帖』(自由国民社、1953年)／丸山珪一氏
173	『映画評論』	1953年(昭和 28)7月号	1	発行・映画出版社	丸山珪一氏
174	『シナリオ文庫16集 広場 の孤独』		1	発行・映画タイムス社。俳優座・新東宝提携作品	丸山珪一氏
175	『近代映画』	1953年(昭和 28)10月号	1	「太陽とスタアと監督と」。映画「広場の孤独」の京都ロケ報告	丸山珪一氏

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。

計175件225点